

Vulnerability and Resistance of Urban Spaces against Crimes Focusing on Human-Environmental Relationship

杉野, 弘明

<https://doi.org/10.15017/1441003>

出版情報：九州大学, 2013, 博士（人間環境学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏 名 : 杉野 弘明

論文題名 : Vulnerability and Resistance of Urban Spaces against Crimes
Focusing on Human-Environmental Relationship
(人間-環境に着目した都市空間が持つ犯罪に対する脆弱性と抵抗性
に関する研究)

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

国際的に見ると安全な国でありながら、国民の犯罪に対する不安は高いという「安全・安心」に関して特有の課題を持つ日本において、近年、防犯は一般市民によっても関心が高く、日常的に考慮される対象となりつつあり、人々が暮らす都市で発生する犯罪の未然防止を意図した研究(以下、都市防犯研究)は、住民が安全に、かつ豊かに暮らす都市環境の実現を目指すために今後ますます必要とされていくと予測される。日本における都市防犯研究の歴史を振り返ると、先駆する海外の理論をベースにしながら、犯罪発生との関連性から空間・時間の犯罪に対する「脆弱性」を明らかにする研究や、犯罪不安に関する研究、防犯環境設計や防犯まちづくりに関する研究など、多くの知見が積み重ねられてきた。しかし、他の先進国に比べると元来犯罪発生率が低い日本において、犯罪発生に関するデータのみから防犯に関する研究を行うことの限界や、得られた知見をもとに実践された犯罪対策や防犯まちづくりの方法論の効果を検証することの難しさも同時に明らかとなってきている。ところで、日本における都市の西洋化・多様化は、必ずしも西洋と日本の都市における犯罪発生傾向をも同じにはしておらず、これまでも低い水準を保っていることから、日本の都市は未だに犯罪に対する「抵抗性」を有していると考えられることも出来る。そこで本研究では、日本の都市空間が持つ犯罪を「しづらい」と感じさせ得る「抵抗性」に質的なアプローチで迫り、実際の犯罪二種に関する実証的研究において空間の「脆弱性」に留まらず「抵抗性」をも考慮に入れ、総合的な「防犯力」を量的なアプローチによって明らかにした。

第1章では、本研究全体の背景と目的、論文全体の構成を述べると共に、これまで日本にて行われてきている都市防犯研究をレビューし、本論文の目的と意義を述べた。レビューの結果として、日本における既往研究の多くは、都市防犯研究としながらも、実質は「犯罪発生」に関する研究を行い、その犯罪発生傾向から逆説的に防犯を考えるという研究が殆どであることを浮き彫りにした。

次に第2章では犯罪学及び防犯に関わる諸学問における研究の歴史的変遷をレビューした。結果として、既往研究の多くでは、これまでに空間が持つ犯罪に対する「脆弱性」のみが着目されており、かつ空間の「抵抗性」を論じるに至っていないことを明らかとした。また、そのような歴史から生じた日本の防犯研究が抱える問題点を指摘し、その解決策となり得る「しづらさ」を取り上げるという研究のオルタナティブを指摘した。

第3章では、次章以降で「しづらさ」を取り上げるために、「しづらい」と感じられる空間とはどういったものなのか、そしてどのように感じられるのかを、環境心理学・生態学的心理学からの観点から、4つのエピソード分析をもとに考察し、最終的に「しづらさ」を扱い得る人間と環境のトランザクションを統合モデルとして表現した。

第4章では、人間が環境に関わる具体的な機会犯罪として放火を取り上げ、放火を「しづらい」と感じる空間についてのフィールドノートを基にGTA (Grounded Theory Approach)を用いて放火に対する「抵抗性」に繋がる路上の空間特性を明らかにした後に、従来の研究から得られていた「脆弱性」に関する項目を含めた空間評価指標を作成し、放火発生の顕著な地区を対象に空間的特徴の評価を行った。結果から、防犯カメラ等の積極的な防犯関連設置物以上に、自動販売機や収集待ちのゴミ袋等の住民の日常生活に関わる物に対して、「人通り」、「被視可能性」、「非匿名感」の大きく3つに分類される「抵抗性」が見出された。また、各地区が持つ放火に対する「脆弱性」の特色を、5つの側面（「非制限感」、「接近可能性」、「非被視可能性」、「荒廃感」、「実行可能性」）から評価し、それぞれの地区が必要とする改善点を評価の数値パターンに応じて明らかにした後に、上記「抵抗性」を生み出す住民の生活関連路上設置物の配置を含めた、地区単位における「脆弱性」と「抵抗性」の両面からの防犯環境設計を提案した。

第5章では、日本において発生件数が多い機会犯罪である自転車盗難を、人間-環境を見るべきもう一つの具体的な犯罪として取り上げた。対象校区内におけるフォーマル・インフォーマル問わず駐輪が行われている全てのポイントから、自転車盗難を「しづらい」と感じるポイントについての記述を収集し、それらテキストデータに対してテキストマイニングを行うことで、記述の中から自転車盗難の「しづらさ」に関連する視認物や状況を抽出した。その後、抽出した「しづらさ」に関わる「抵抗性」の指標と、既往研究で明らかとなっていた「脆弱性」の指標を合わせ、全駐輪ポイントを定量的に評価し、その結果と実際の自転車盗難発生に関するデータとの相関性を明らかにすることによって、自転車駐輪空間の「防犯力」を「脆弱性」と「抵抗性」の二つの関係性により説明出来ることを明らかにした。また、最終的な結果から、「防犯力」の高い駐輪場を整備するためには、駐輪場と駐輪した後に所有者が向かう目的地の関係性を明確にし、また自転車の数が極度に集中しないように小さい駐輪場を数多く配備する工夫が必要であるという示唆を得た。

最後に第6章では、前章までに得られた知見をもとに、日本におけるプロアクティブな都市防犯に関する研究の方向性として、路上空間が持つ犯罪に対する「脆弱性」のみならず「抵抗性」を考慮する手法により、相反する二つの性質の拮抗を考慮した上で総合的な「防犯力」を求めることの有用性を議論し、本研究全体における手法論を基にした日本における今後の防犯研究に対する展望に言及した。